

安部龍太郎 著

『天才信長を探しに、旅に出た』

公営企業金融公庫理事 片木 淳

東海道新幹線で静岡、岐阜、関ヶ原、近江あたりを通過する際、折に触れて、織田信長の電光石火の往来や激しかった合戦の数々を思い出す。そして、一度暇を見つけて途中下車し、桶狭間、清洲、姉川、安土など信長ゆかりの地を郷土史家のように、ゆっくりと歩きたいと思うのだが、雑事に紛れ、実現できずに今日に至っている。

だから、先日、本屋の店頭で安部龍太郎氏の『天才信長を探しに、旅に出た』を見つけた時は、すぐこれに飛びついた。

著者は、新しい作品を書く時には、「資料や研究書だけでは、分からない生の声を聞くために」、必ず主人公ゆかりの土地を訪ねることにしているのだそうである。先般、日本経済新聞に『信長燃ゆ』を連載した時も、東海地方は勿論、精力的に各地を踏査し、その成果が今回の著書に結実した。本書は、「信長の生涯を戦国大名の合戦譚としてではなく、革命のための戦いという視点からとらえ」、各地に信長の足跡を訪ねて、天才なるがゆえに苦難の道をたどらざるを得なかった彼の生涯に迫ろうとするものである。

天才と凡人の間には、大きな断絶の深淵が横たわっている。凡人にとって、天才の行動は全

く理解を超えたものである。

我が日本史上、そういう意味での天才と呼べるのは、織田信長ぐらいのものではなからうか。

折りしも、NHKの大河ドラマ「利家とまつ」で、反町隆史が好演しているが、現在に生きている我々からみても、信長が何故あのように時代を超越できたのか、全くの謎である。ひょっとすると、今の我々よりも、なお先を行っているかもしれないという畏怖の感さえ抱く。

天才信長の謎を思いつくままに挙げてみよう。

- 1 立ちながらに湯漬けをかつこみ、わずか六騎で飛び出した信長が、2千の兵で10倍以上の今川軍を打ち破ることができたのは、何故か？果敢なる決断力とリーダーシップは、どのようにして培われたのか。
- 2 日本で最初に、本格的に鉄砲を合戦に活用して武田騎馬軍団を壊滅させ、また、ヨーロッパに百年先んじて鉄鋼船を建造、毛利水軍を撃破することに成功したが、このような最先端技術に対する理解と実戦への適用能力は、どのようにして身に付けたのか。
- 3 楽市楽座と関所の撤廃により商品流通を拡大させ、近世経済隆盛の基礎を築いたが、そのような自由主義的経済に対する知識や洞察力、未知の政策を実行する力は、どのように

して生まれたのか。

- 4 比叡山延暦寺の僧俗5千人を焼き殺し、一向一揆を根絶やしにするなど、宗教の呪縛さえ乗り越えたが、このような既成観念からの自由な発想と破壊力は、どこから来たものか？狂気故なのか。
- 5 秀吉、光秀の抜擢など、能力本意の大胆な人材登用を行ったが、そのような、地位身分を超越した人間観は、どこから来たものであるか。
- 6 黒人を小姓にし、宣教師たちから世界情勢を積極的に取材し、理解した、国際性とグローバルな世界観は、どこで身につけたのか。
- 7 正倉院御物の香木「蘭奢待」を削り、安土城に皇居清涼殿とそっくりな部屋や自らを捧ませる寺を作るなど、天皇さえも超えようとした、その思想の背景は何か。
- 8 自身愛唱の「敦盛」のとおり、50歳直前に、もっとも信頼すべき直属の部下に本能寺で殺されたが、光秀の個人的うらみだけが原因とは思えない。事件の真相は何か。

本書は、父信秀以来の経済力の基盤となった木曾川の港町、津島から始まって、桶狭間の古戦場は勿論、近江六角氏の観音寺城跡、20年計画で発掘調査と再現工事の進む安土城跡等数多くの信長ゆかりの地を、その事跡を回顧しながら訪ねていくのであるが、その旅は、ついには鹿児島、さらにイタリアのパドバにまで及ぶ。

鹿児島は、近衛前久が信長に頼まれて、島津貴久との和を図るため、一年も滞在した土地である。筆者は、最近の信長研究の成果を活用し、信長包囲網の黒子の仕掛け人として、前久を取り上げているが、薩摩、大隅、日向の三国は、長く「島津の荘」と呼ばれる近衛家の荘園であり、近衛家と島津家は主従に近い関係にあった

のである。近衛前久は、関白在職のまま上杉謙信と伴に、関東に攻め入るなど、朝廷と幕府の再建を図ろうとしていた仲々の傑物であるが、同時に書、和歌、連歌、鷹狩にも通じるなど、大変な文化人でもあった。薩摩滞在中、朝鮮での活躍と関ヶ原の敵中突破で有名な義弘の兄で、九州統一あと一歩だった島津貴久の嫡男義久に、和歌の奥義「古今伝授」を授けたりしている。

また、筆者がパドバを取り上げているのは、信長が丁重に迎えたイエズス会の東インド巡察使、ヴァリニャーニが学生時代を送り、日本に来る遠因となった事件を起こした土地だからである。ヴァリニャーニは、若き学生時代、泥酔の上、フランチェスキーナという若い女性の顔に14針も縫う大怪我を負わせたことから、自らの罪深さを反省、生涯布教に身を捧げようと決意したのであった。

筆者は、本能寺の変の真相として、立花京子氏の研究を取り上げ、信長が、天正8年に催した馬揃えの主目的は、フランシスコ・ザビエル以来の超大物であるヴァリニャーニの歓迎のためであり、自分こそが朝廷よりも上に立つ日本国王であることを示したかったのであるとする。

そして、本能寺の変の背後には、信長が天皇の上位に立つことを阻止したい近衛前久等と、イエズス会との関係を良好に保ちたいキリシタン大名の新政権への模索があったとする。

このようにして、筆者の天才信長を探す旅は終わるのであるが、小生の印象としては、依然、信長は、霧のかなたである。今回も、また、「書き完えた後、いよいよ謎は深まった」(秋山駿「信長」)われらの天才信長様であった。

(日本経済新聞社)